



媽媽

ママ
わたしは生きている

中国残留孤児・残留婦人激動の四十年

岡庭昇・真野貢一

毎日新聞社

ママ

媽媽

わたしは生きている

中国残留孤児・残留婦人激動の四十年

岡庭昇・真野貢一



著者紹介

岡庭 昇 (おかにわ・のぼる)

1942年12月、東京生まれ。1966年、慶大経済学部卒、TBS入社、TBSプロデューサー、文芸評論家。著書に「幻想の国家とことば」(筑摩書房)、「偏見の構造」(河出書房)「犬の肖像——大衆文学の世界」(三一書房)などがある。

真野貢一 (まの・こういち)

1953年7月、長崎市生まれ。1966年、日中友好運動に参加、1975年中国を初訪問、以後訪中36回。1982年日中映像企画創立に参画、プロデューサーとして中国東北部の取材に専念する(1984年、同社代表に就任)。1983年に中国・黒龍江省テレビ局と合作で長篇ドキュメンタリ「友誼の大地——黒龍江省紀行」制作。1984年、TBSで「ハルビン監獄」制作。

媽媽わたしは生きてゐる
中国残留孤児・残留婦人激動の四十年

定価 一二〇〇円

昭和六十年七月十五日 印刷
昭和六十年七月三十日 発行

著者 岡庭 昇

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋
五三〇 大阪市北区堂島
八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 正文社

はじめに

この本は、真野貢一（日中映像企画代表取締役・日中友好運動家）と、岡庭昇（TBSプロデューサー・文芸評論家）の両名が、全面的に書き下ろしたものである。TV番組製作における体験や調査は、大きな参考資料となっているが、すべての資料が引用の範囲を出ないように、それらもまた間接的な基盤に他ならない。ときにインタビュ形式が登場したり、一人語りや会話なども登場するが、これは新しいドキュメンタリ形式の著作物を作ってみたという、両名の意気込みから派生した文体のこころみである。つまり、すべてが両名によって書き下ろされた原稿の、構成的なバラエティのこころみとして、独白体や、会話体が、まざっているということなのである。このことを念のためにお断わりしておきたい。

中国残留孤児をめぐる問題は、本来、あまりにも大きい。大きく、かつ重要な課題である。そして、これだけ大きな、かつ重要な課題であるのに、これほど放置され、忘れられている問題も、まためずらしいといえる。戦後、日本の国家は、かつての「満州」侵略を忘れたために、意図して残留孤児問題を「存在しないもの」としてきた。日中国交回復後、残留孤児や中国当局の熱意に負けて、次々と親探し帰国を制度化したように見える。しかし、この段階にきてもお、歴

史的な理由や国家の責任を棚上げしたうえで、単なる感傷としての“親探し”に問題をおしこめている。そのため日本の若い世代は、いったい残留孤児とは何者なのか、なぜ成田空港で泣いているのか、さっぱり理解できない。中国人なら誰もが知っている“残留孤児”という歴史的存在を、当の日本人の大半が知らないという、恥ずかしい状況が起きている。日本人に固有な、無責任社会の一例である。そして、そのような状況のなかで“孤児問題は家族間の私事である”という、日本の行政の姿勢は、一貫して改められないままだ。日本のマスコミは、親探し帰国のおきに限って、孤児をニュースで扱う。その歴史や、本質についてはまったく触れない。ましてや、残留日本婦人など、ほとんど正面から取り上げられたことさえないのである。

問題は、大きく三つに分けられる。

④ “残留孤児”と“残留婦人”が成立した歴史的な事情、ある意味で、それは彼らの存在の本質を規定する。

⑤ 残留孤児が、同時代の中国人であるという事実。このことは、未だかつて直視されていない。

⑥ 日本の実父母、兄弟を探しあて、その後永住帰国した孤児、婦人、およびその家族が、日本でのような生活の場を獲得しえているか。

以上である。

岡庭は一昨年、④を報道するべく、『中国残留孤児・麻山事件』（『そこが知りたい』TBS系）をドキュメントした。また、⑥を『続・中国残留孤児・日本帰国後の現実』（同）として報告し、レ

ポーター・鳥井守幸氏（毎日新聞論説委員）ともども、受け入れ態勢のあまりの不備に疑問を投げかけた。

残るのは⑧である。この問題は、従来、中国側の取材許可が出ず、企画しても表現の可能性がなかった。それを、真野貢一の、永年の日中友好運動における過程と、中国・黒龍江省当局との信頼関係が可能にしたのである。真野はすでに岡庭と組んで『ハルビン監獄』（『日曜ゴールデン特版』TBS系）を作っていた。

真野貢一の企画推進により、黒龍江省外事弁公室（外務省）のバックアップが実現し、中国残留孤児、日本婦人の中国（とくに旧満州、なかでも黒龍江省）での日常生活に接することが可能になった。そこで、『終戦40周年特別番組・媽媽^{ママ}、わたしは生きている』（TBS系・一九八五年八月六日放送）が、真野・岡庭らによってつくることになったのである。

この本も、⑧を主たる内容として書き下ろされた。すなわち、中国残留日本人孤児、日本婦人の、中国人としての日常のレポートである。この場合、対象は次の三点であるというように認識されるべきである。なお本書では、地名・人名のルビをすべて日本読みに統一した。一部、通称に準じたものもあるがご了承願いたい。

① 中国残留日本人孤児。

② 日僑^{にっきょう}（残留日本婦人）。

③ 日僑二世（残留婦人が連れ子として入嫁した子供。あるいは中国人と結婚して生まれた子供。特に前者）。

従来、①と②は混同されているが、分けて考えられるべきだろう。

とはいっても、この本には、④の歴史の要素も数多くとり入れた。その方が、孤児や残留婦人について理解しやすいと思ったからである。特に敗戦時の歴史を典型的にあらわす哈達河開拓団（とその集団自決である麻山事件）を例とした。

記録をまとめる作業の中で、いま、ことさらに、“国家とはいったい民衆にとって何なのであろうか”という思いを強めることになった。もし国家が災厄であるとして、そして“満州移民”とその子供を襲った運命が、そのあまりにも苛酷な実例であるとしても、残留日本婦人、孤児は“新中国人”として明るく生きている。その個人的な生命力によって、災厄としての国家をはね返した、と言ってもいいかもしれない。これら“大和族”の立派な日常と明るい未来に、われわれの救いも、また、賭けられているといえよう。

この本が、中国残留日本人孤児、残留婦人の理解に少しでも役立ち、問題の解決にささかの力を与えることができ、もって日中友好に役立てば、著者らの永年の微弱な努力も、少しは報われようというものである。

一九八五年五月二十五日

岡庭昇

媽媽、
媽媽、

わたしは生きて
いる

目次

はじめに

1

序章 媽媽、わたしは生きている

11

第一章 「新中国人」の誕生

29

第二章 同時代のいま

59

第三章 残留婦人・激動の四十年

85

第四章 日本語の話される村

105

第五章 孤児からの手紙

125

第六章 いま華ひらく元少年義勇兵

145

第七章 忘れられた養父母たち

157

第八章 ハルビン外僑養老院

177

第九章 望郷の背後にあるもの

191

第十章 問われているものは何か

205

別章 哈達河^{ハタホ}開拓団の人びと

211

おわりに

243

装
幀
薦
本
咲
子

媽媽^{ママ}、わたしは生きている

中国残留孤児、残留婦人激動の四十年……

This map illustrates the location of Heilongjiang Province within China. It shows the province's borders with Mongolia to the north and northwest, and Jilin Province to the south. The Yellow River flows through the northern part of the province, while the Nen River and Nenhe River are prominent in the west. Major cities like Harbin, Qiqihar, and Jiamusi are marked. The map also indicates the location of Lake Khanka at the border with Jilin.

Legend:

- 中ソ国境 (Sino-Soviet Border)
- 河川 (River)

*

*

小川真理生（速記・編集）

序章 媽媽^{ママ}、わたしは生きている

王新華の場合……

媽媽^{ママ}、わたしは生きています。ここにこうやって、こんなに元気で……。

媽媽、わたしはあなたの名前を知りません。わたしの日本名も知りません。

あなたは何という名前で、どこに、いま、どうしているのですか。

わたしの日本名は、何というのですか。

ここにきて、教えてください。

そして、敗戦の年、八月、わたしたちの前で何が起こったのかを、わたしに語ってください。

わたしの中国名は、王新華^{おうしんか}。四十歳になりました。黒龍江省齊齊哈爾市龍沙区^{りゅうさく}に、夫や子供た

ちと幸せに暮らしています。夫・胡俊波^{こしゅんは}（四十三歳）とは近所の幼馴染みで、労働者文化宮の文芸

活動で一緒でした。一九六四年に結婚しました。面白いことに、じつは夫は、子供のころわたしのことを「日本人の子……」といって、よくいじめたものでした。いまは、すごく仲が良い夫婦

です。

わたしの仕事は、自動車工場の塗装です。夫も、同じ自動車工場に勤めていて、職場主任です。長女・胡慶文（二十一歳）も同じ工場に勤めています。十八歳の長男・胡慶奎は、高校を出しました。いま、仕事を待っています。中国という待業状態です。下の男の子・胡慶印は十六歳、いま、中学一年生です。

媽媽、安心してください。夫は優しい人で、子供たちもいい子たちです。家族はとても仲がよく暮らしています。わたしを育ててくれた養父は、昨年の四月に亡くなりましたが、養母はチハル市内に、別の中国人の養女と一緒に暮らしています。よく行き来して、養母との仲も、とてもいい状態です。

媽媽、わたしの家は質素で、何の飾りもありませんけれども、こざっぱりとした清潔な家です。とても住み心地のいいところです。夫は手先が器用なので、いろいろな家の中のことを手伝ってくれたり、棚を作ってくれたり、家具や装飾をしてくれたりします。

媽媽、あなたを捜しに、一九八五年二月、日本を訪れました。わたしの記憶は何もありません。ただ、養父母に、わたしの養子縁組みを斡旋してくれた野村定夫という大工さんの名前がわっているだけです。テレビで、それを言いました。野村さんはもう亡くなっていました。テレビをみて、千葉に住んでいる野村さんの娘さんが駆けつけてきてくれました。でも、彼女はお父さんの昔のことは何も知りませんでした。だから、わたしのことも、何も手がかりがなかったのです。せっかく日本に媽媽を捜しに行ったのに、肉親が誰ひとりみつからず、名前もわからず、その時



チチハル：王新華（前右）の家族

は本当につらい思いをして、中国に帰ってきました。

媽媽、敗戦の年のことで、わたしの知っているのは、次のようなことだけです。

一九四五年、野村定夫という日本人の大工さんが、自分の家で働いていた中国人に、わたしを預けました。養子縁組みに出したわけですね。養父の名前は、王宇寛^{おううかん}、養母の名前は、王亜潭^{おうあたん}です。その時、家族がどこから逃げてきていたのかは、まるで手がかりがありません。たまたま国

境から逃げてきて、チチハルにいったん落ち着き、鉄道倉庫に住んでいたようです。わたしの他には、媽媽、あなたと兄、姉がいたという話です。父さんはすでに、関東軍に応召して、のちシベリアへ行ったという話です。

どこの開拓村から移動してきたのかもわからず、名字もわからないため、手がかりはまったくありません。

わたしは子供のころから、自分が日本人孤児であることは知っていました。周りの人たちから聞かされたからです。でも、あんまり詳しくは、知りたいと思いませんでした。養父母を、本当の親だと思ったからです。

結婚した翌年、長女を生んだ時、養母から、「お前は日本人孤児で、養子にもらったのだ」ということをはっきりと告げられました。でも、うすうす知っていたこと

でも、はっきり聞かされるのがとてもつらくて、そんなことは聞きたくないと言って、詳しいことを聞くのは、自分のほうから断わったのです。優しい養父母を本当の両親と思いたかったし、それにどこの誰ともわからない、名前もわからない、出身もわからない空白の自分にはなりたくありませんでした。

一九七二年、日中国交は回復し、七七年あたりから、文化大革命の影響は消え、中国と日本の関係は、非常に良くなりました。そのころ、同じチチハル市内の、何人もの日本人孤児の肉親がみつかったという話を聞きました。その時です。わたしが、媽媽、あなたの名前を、あなたの顔を、あなたがわたしと別れた時に、どんなふうに泣いたかを、そんなことのすべてを心から知りたいと思いはじめたのは……。

そして、いろいろと養母や周りの人たちに話を聞きはじめました。でも、手がかりは、さっき言ったような、ほんのかすかな養母の記憶しかありません。一九七九年、市の公安局に、日本人孤児として登録しました。つまり親捜し帰国をしたいという希望を正式に出したわけです。養母はほとんど何も知らなかったのですが、養父は詳しく知っていたようです。でも、あまり教えてくれないまま死んでしまいました。

媽媽、わたしはいま、日本国籍をとりたいと思っています。理由は、自分が日本人だからです。日本国籍をとっても、中国で生活する上で何の不便もありません。むしろいまは、他の少数民族と同じように尊重されています。

媽媽、八五年二月、あなたを捜しに行つて、何の手がかりもなく、つらい思いをした時、でも、